

【根拠資料2-4】

教育学部学生調査 2016 年度前期 結果速報

※経年変化を見るために、同一サンプルでセメスター間の平均値の有意差を見る際には、対応のある t 検定を用いた。

1 年生 (46 期)

- ① ＜基礎的な学習方略 (3 項目)＞において、2 割 (39 名) の学生が 9 点以下であった。大学入学までに習得すべき基礎的な学習方略を日常用いていない新入生が、全体の 2 割ほどいることが示唆された。
- ② ＜プランニング方略 (3 項目)＞において、4 割 (83 名) の学生が、9 点以下であった。学習に計画的に取り組むことに慣れていない新入生が、一定数いることが示唆された。
- ③ ＜展望＞と、＜基礎的な学習方略＞ ($r=.308$)、＜プランニング方略＞ ($r=.340$)、＜モニタリング方略＞ ($r=.350$)、＜セルフ・マネジメント・スキル＞ ($r=.317$)、＜コーピング・スキル＞ ($r=.394$) との間に、中程度の有意な相関が見られた。大学生活や卒業後の展望が持っているほど、大学生活で必要な各種スキルを身につけているとの自己認知が強いことが示唆された。反転すると、大学生活や卒業後の展望が持っていない新入生は、大学生活を送る上でのスキルから習得していく必要があると推測された。

2 年生 (45 期)

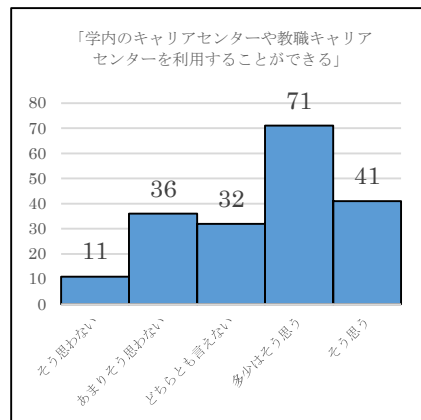
- ① 1 年前期と 2 年前期で、学習方略とセルフマネジメントの平均値に違いがあるか比較したところ、＜モニタリング方略＞でのみ、1 年次から 2 年次にかけて有意に上昇していた (前期: 14.65、後期: 15.09、 $t(157)=-2.210$, $p<.029$)。大学教育の成果の一つと考えられた。
- ② ＜学習に対する自己効力感＞と各種学習方略との相関関係を調べたところ、＜基礎的な学習方略＞ ($r=.143$) との間には有意な相関は見られなかった。一方で、＜モニタリング方略＞ ($r=.340$)、＜プランニング方略＞ ($r=.440$) においては中程度の有意な正の相関が見られた。2 年生になると、基礎的な学習方略ではなく、より高次の学習方略を使えることが、学業面での自信に繋がると推測された。
- ③ 「新たな環境に適応し馴染むことができる」と＜落ち込みのサイン＞との間には、中程度の負の相関が見られた ($r=-.424$)。2 年生になり寮を出る学生など、生活面で大きな変化を経験する学生にとって、新しい環境に馴染めるか否かはメンタルヘルスにも影響があることが示唆された。

3 年生 (44 期)

- ① ＜学士課程のアウトカム＞において、「他者と協調・協働して行動する力」「自己の良心と社会のルールや規範に従って行動する力」が「身についた」「多少は身についた」と回答した学生は 8 割以上のぼった。
- ② 「日本の文化・伝統に関する理解」「外国語を用いてコミュニケーションをする力」「論理的に一貫し

「話ができる」においては、「あまり身につかなかった」「全く身につかなかった」、と回答した学生が、約4割であった。

- ③ 「学内のキャリアセンターや教職キャリアセンターを利用することができる」において、2割以上(47名)の学生が、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した。「どちらでもない」と回答した学生を含めると、学生の4割にのぼる。3年生の時点で、多くの学生が大学側のキャリアサポート資源の利用に自信がないことが示唆された。



4年生 (43期)

- ① 「自分の意見を発信することができる」の2年次、3年次、4年次の平均値に違いがあるか比較したところ、毎年有意に上昇していた(2年前期: 2.99 → 3年前期: 3.27、 $t(140)=-3.205, p<.002$) (3年前期: 3.30 → 4年前期: 3.66、 $t(131)=-4.459, p<.000$)。大学教育の成果の一つと推察された。

- ② <学部のアウトカム>において、学問的視点を養う機会があったか否かを問う設問に「大いにあった」「多少はあった」と答えた学生は7割以上に上った。一方で、実践力や現場対応力を磨く機会は「あまりなかった」「全くなかった」と感じている学生が3割程度であった。

